

都市の読解とそのおもな手がかり (その2)

比較都市論 (その1 : つづき)

1 名古屋と大阪 : グリッドの大都市としての比較

名古屋

- ・名古屋台地 (熱田台地) の逆三角形の上に立地した城下町、南の端が熱田神宮・熱田宮宿 (みやのしゅく)
- ・台地の西の縁に堀川、東の端に新堀川
- ・1610-1614年に建設、清洲城から移転 (清洲越し)
- ・徳川の秩序を象徴する城
- ・もっとも新しい計画都市としての城下町
- ・50間四方のグリッド都市 : 通りは3間幅、本町通りのみ5間幅、本町通りがタテに貫通するタテまち
- ・三の丸以北の武家地はグリッドではない→兵部省敷地へ、のち名古屋鎮台 (陸軍第三師団)
- ・県庁舎が1877年に本願寺の仮庁舎から広小路の突き当たりに移転
- ・広小路の東半分は1660年大火後の火除け地、西半分は1881年より堀川まで13間に拡幅
- ・名古屋駅開設 (1886)、ただし現在地より南より、県庁舎と駅舎が広小路通りを介して向き合う構図
- ・広小路通りに全国2番目の路面電車が開通 (1898)
- ・1889年に東海道線が全通
- ・路面電車の南北線をどこに通すか : 本町通ではなくエッジの大津町を13間に拡幅 (1902-1908)、大津町通り (現大津通)
- ・広小路通と大津通の交点が都心として浮上してくる
- ・市庁舎 (1933)、県庁舎 (1938) が北の丸、大津通沿いに移転、現在のシビックセンターを形成
- ・戦災復興土地地区画整理事業 : 当初のグリッドを活かして、3本おきに拡幅
- ・南北路は西から伏見通 (建物疎開道路)、本町通、大津通、東西路は北から外堀通、桜通 (建物疎開道路)、錦通
- ・100m道路 : 久屋大通と若宮大通 (+新堀川) で十文字の防火路線帯をつくる
- ・いずれの大通もかつての都市のエッジだった

大阪

- ・上町台地の北の突端に古代の難波宮が立地 : その南に朱雀大路 (その先の難波大道)、南西に四天王寺
都市軸は南北軸
- ・のち四天王寺周辺の門前町
- ・石山本願寺の時代
- ・秀吉による大阪城の建設 (1583) : 四天王寺から北へ延びる平野町 : 都市軸は南北軸、ただし、古代の軸とは少しずれる
- ・惣構堀の開削開始 (1594) : 現在の東横堀川、その後、西横堀川 (1600-1620)、長堀川 (1619-1622、現長堀通)、道頓堀川 (1612-1615)
- ・大阪城の周囲が三の丸として武家地となる、市街地は西へ計画的に展開される→40間四方のグリッド都市
- ・東西路は通り (幅員4間3分)、南北路は筋 (幅員3間3分) : 都市軸は東西路へ
- ・背割りは東西、東から西へ背割り水路が流れる
- ・船場、島之内、西船場、北に天満、北西に中之島、堂島、
- ・そのまま幕末まで
- ・大阪駅 (梅田停車場) の建設 (1874)、南海による難波駅の建設 (1885)、両者をつなぐ御堂筋の建設 (1926-37) : 都市軸がふたたび南北軸へ
- ・船場建築線 (1939)、長堀川の埋め立て (1960-71)、西横堀川の埋め立て (1964-71)

比較都市論（その2）

1 港町を考える

- ・中世かそれ以前にさかのぼる古い集落形態、高密度
 - ・狭く地形に沿って曲がる街路、緊密な町家、斜面都市
 - ・漁村と交易の港
 - ・海に面した港と川港（川湊）
 - ・縄文海進
 - ・潮の干満
 - ・浜へのアクセス
 - ・浜でのアクティビティ
 - ・信仰の軸、まつり
 - ・海流、風除け、岬、岩、その他の地形・気象的要因
 - ・海からの見え方
 - ・海中の地名
 - ・物流、はしけ、堀
- ・近代化、近代的都市施設の用地問題、市庁舎・県庁舎は通常、既成市街地の縁辺部に立地
 - ・海へ開いた都市から陸へ開く都市へ
 - ・近代港湾、税関、新港

2 港町編：横浜と神戸、そして長崎、函館、新潟（以上、開港5都市）加えて青森

横浜

- ・かつての漁村、砂嘴がのびる、突端に弁天社、浜に並行した弁天通り
- ・1859年、開港
- ・1866年、豚屋火事、関内の2/3が焼失
- ・その後、幅員120ftの中央大通り、のちの日本大通りができる
- ・一方に避難場所をかねた公園（大火前は港崎（みよざき）遊郭）、もう一方に税関が見合う、防火帯の機能も有する広幅員道路
- ・日本大通り幅員36m、1870年頃形成され、1875年に命名される
- ・日本大通をはさんで、西が日本人居住地、東が外国人居住地、東西で街区構成が異なる
- ・西側の日本人居住地には、薩摩町、加賀町、駿河町、豊後町、蝦夷町など
- ・日本大通り沿いに、県庁舎、地方裁判所、簡易裁判所、郵便局、日本銀行などが建つ
- ・不動の都心としての日本大通り
- ・開港5港（横浜、神戸、長崎、新潟、函館）を比較する
- ・横浜は函館と都市構造が似ている

函館

- ・18世紀初頭までさかのぼる函館村、弁天社がある、門前がにぎわっていた、浜と並行した弁天通り
- ・奉行所の場所のはのちの元町公園
- ・基坂の上に公園、下に税関が見合う
- ・基坂という政治の軸と弁天通りという商業の軸が交差する
- ・1878年、1879年の大火、その後に近代的都市計画
- ・ただし地形的にはすり鉢型で、神戸に似ている
- ・のちに都心は五稜郭の方角へ移動

神戸

- ・西約3kmのところ兵庫津があったことがおおきく異なる
- ・都心も兵庫津と居留地間で移動する
- ・地形、幹線が東西を貫通する点も異なる
- ・税関の位置が偏心、かつての神戸海軍操練所（1864-65年）、のち運上所
- ・居留地中央に幅員90ftの南北路（京町通）、このほか、東西2本南北4本の街路
- ・海岸縁に緑地とプロムナード

- ・外国人居住地のみ、日本人は兵庫津へ、横浜の1/5の規模、外国人は生田川（現フラワーロード）と鯉川（現鯉川筋）の間に雑居を認める、中国人も外へ（現南京町）
- ・兵庫津と居留地をいかに繋ぐかがテーマ、賑わい・諸施設の東遷（県庁舎、市庁舎、三ノ宮駅など）
- ・西国街道が元町商店街へ、海岸通（1872）、栄通（1873）
- ・川の付け替え、暗渠化：生田川（1871）、鯉川（1875）、湊川（1897-1901）、宇治川（1940-72）
- ・モザイク都市

長崎

- ・長い岬の突端の高台に立地した年輪都市、尾根道は長崎街道、根元に諏訪神社－先端に奉行所
- ・1570年、開港6ヶ町（島原町、大村町、平戸町、横瀬浦町、文知（ぶんち）町、外浦（ほかうら）町）
- ・1580年、町全体がイエズス会に寄進される
- ・1614年、教会跡地に長崎奉行所、現在は県庁舎敷地
- ・1636年、奉行所前が埋め立てられ、出島となる
- ・三重の堀、内町はイエズス会から没収した土地、その外側に外町、山際に寺院群
- ・南山手・東山手に外国人居留地建設（1859-70）

新潟

- ・1617年、1655年に再度移転した、計画都市、川湊、
- ・西堀と東堀、古町と本町、大川前通りが並行する、これに直行して40本ちかい小路
- ・5本の堀と西堀・東堀による物流ネットワーク
- ・非震災都市、道路網と小路名が良く残る
- ・1904年、沼垂川に（旧）新潟駅、榎谷小路によって都市をひらく
- ・榎谷小路はかつての新潟奉行所跡地を貫通、万代橋へ
- ・1964年国体時までにはほぼすべての堀の埋め立て完了

青森

- ・1624年、津軽藩によって弘前の商業港として善知鳥村に計画的に建設された、東廻り航路対応
- ・善知鳥（うとう）神社が芯、神社前が札の辻、道路元標、ここから東へ3本の街路
- ・明治初年の青森戸長役場（1880）も町役場（1889）も警察署も郵便局も最初は善知鳥神社境内
- ・浜町、本町（中町、大町とも）、米町の3本、東の境川までのびる
- ・1891年、青森駅が善知鳥神社の裏側にできることによる都市の反転、新町通りがメインに
- ・県庁舎・市庁舎ともに南縁に立地、国道4号線と7号線の終点
- ・南北の幹線路、柳町通り（幅員50m）、防火帯を兼ねる
- ・中央南側に寺町